

令和元年5月21日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16H01894

研究課題名(和文) 宗教の政治化と政治の宗教化：現代中東の宗派対立における社会的要因と国際政治の影響

研究課題名(英文) Politicisation of Religion and Sectarianisation of Politics in the Middle East

研究代表者

酒井 啓子 (Sakai, Keiko)

千葉大学・大学院社会科学研究院・教授

研究者番号：40401442

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 35,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は、2000年代後半以降以降、グローバルな暴力の噴出において宗教的色彩が強まっていることを問題視し、なぜ突然宗派が紛争の対立軸として浮上したのかを解明した。サウディ対イランの「中東新冷戦」と呼ばれるように、宗派対立が何故周辺国全域での対立軸へと転換したのか、いかなる契機で宗派的差異が政治的対立に発展し、さらには暴力化するのかについて、イラク、レバノン、湾岸諸国、イエメン、イランなど各国の歴史的背景およびエスニックな社会構成から論ずると同時に、政治権力関係のなかで浮き彫りになる宗派関係にも着目した。さらにメディアが持つ宗派的ヘイトの拡散という側面が重要であることも指摘された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中東諸国の宗派問題の事例研究を取りまとめ、晃洋書房より研究報告書「現代中東の宗派問題」を出版した。これまで日本語で出版された「宗派問題」を扱った本格的な学術書は存在せず、日本の宗派研究に一石を投じた意義は大きい。特に中東の宗派主義についての国際的な議論において第一線の論者であるファナル・ハッダード、モーテン・ヴァルビヨン、マーク・オーウェン・ジョーンズを研究期間中に招聘してワークショップを開催し、その寄稿を邦語で発表したことは、貴重な機会である。とりわけ宗派主義という用語のもつ問題性にまでメスを入れた根本的な議論が展開されたことは、今後の中東政治研究の大きなステップとなろう。

研究成果の概要(英文)：This research project aimed to disclose the reasons and background on why the so-called sectarian conflicts have prevailed in all over the Middle East since the middle of 2000s. Cases typical are the civil war in Iraq (2006-07), extreme intolerance of IS against the other sects during their control over Iraq and Syria (2014-17), and ongoing "New Cold War" in the Middle East, inflamed by Saudi Arabia and Iran. During three-years project, research team, composed of the researchers on Iraq, Lebanon, Iran, Yemen, Arab Gulf monarchies, conducted the field researches in the targeted regions, using various methodologies, such as opinion poll and media analysis. During the project period, International Workshop was organized inviting prominent political scientists including F. Haddad, M. Valbjorn, and M.O. Jones. Their contributed chapters were included in our book titled "Sectarian Issues in the Contemporary Middle East", published from Koyo Shobo in March 2019.

研究分野：地域研究

キーワード：宗派

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究課題を開始した当時の国際情勢においては、グローバルな暴力の噴出において宗教的色彩が強まっていることが明白に見て取れた。具体的には、2014年6月、内戦下のシリアで勢力を拡大した「イラク・シャーム(大シリア)のイスラーム国」(ISIS、のちISと改名)がイラクのモースルに進撃、これを数日のうちに陥落させた。この事件は、ISISが極めて短時間でイラク国内の主要拠点を制圧し、一定の面積の国土を支配したことと、それに対してイラク国軍が当初全くといっていいほど機能しなかったという点で、国内外に強烈な危機意識を生んだ。さらにそうした事件に先立ち、イラクではイラク戦争以降、国外のイスラーム武闘派勢力がイラク西部や北部に繰り返し侵入し、イラク国内に内戦状況を生み出していた。2004年末には、ヨルダンのアブダッラー国王がシーア派の台頭に対する危機感を表し、また同じ時期、サウディアラビアのワッハーブ派宗教界においてイラク政権の「シーア派化」を危惧する論調が強まっていた。2015年のイエメンにおけるホーシー勢力の政権奪取とその後のイランとサウディアラビアの断交は、こうした宗派を巡る「対立」がシリア、イラクなど一国内に収斂するものでなく、中東域内全域に蔓延したことを示した。

シーア派とスンナ派の宗派関係については、その敵対関係は本質的にイラク社会に内在するものであり、イラク戦争によりそれまで強圧的政権によって抑え込まれていた宗派間の敵対関係が噴出したため、暴力的な宗派対立へと発展した、と、当時の議論ではみなされてきた。その背景に、オスマン帝国領内の3州を英国の植民地主義政策のために機械的にまとめて人工的な国家建設を行ったという史実を挙げ、イラク国家の人工性、伝統的な国土と国民の一体性の不在を指摘する議論もあった。だが、こうした視点は、オリエンタリズム的な宗派主義史観の延長として批判され、宗派本質主義的な解釈に陥ることの問題点が指摘されてきた。

その一方で、多くの論者は、国家の失敗ないし破綻によって非国家主体が国家を代替する機能を果たし、その結果非ナショナル・アイデンティティがナショナル・アイデンティティに優先されるようになり、宗派対立が表面化した、との議論を展開した。これらは、中東における宗派関係は多くの場合決定論的、本質主義的なものではなく、国内の統治政策の失敗、あるいは動員のための道具主義的なもの、とみなしてきた。

しかしながら、前述したISの出現、さらにはイランとサウディアラビアの対立を軸とした「中東新冷戦」と呼ばれる状況は、宗派関係の変化が国内要因によってのみ説明できない一例を示す事件であった。こうした国境を越えて展開する宗派を巡る武力対立は、宗派関係の緊張を国家・社会関係に軸をおいた国内要因によるものとしてきた従来の議論では、説明できない。この点を解明するために、本研究課題は設定された。

2. 研究の目的

本研究は、さまざまな宗派対立のなかでもとくにスンナ派とシーア派との宗派間関係の緊張を取り上げ、その発生原因と展開過程について、中東諸国(イラク、シリア・レバノン、イラン、湾岸諸国、イエメン、トルコ)の事例を取り上げて実証分析することを目的とした。ここでは近年の宗派対立がイスラームという宗教の本質的要因からではないという前提に立ち、対立の内因性と外因性に着目した。特に宗派間関係を規定する内的要因としての差別や排除など社会経済的、歴史的背景に加え、外的要因である国際政治上の安全保障政策の矛盾や問題点の蓄積によって生じたという点に光を当てた。

また、従来の宗派関係に関する本質主義的論争を超えた新たな紛争解決の糸口を提示するために、宗派的言説が過剰な暴力を伴う政治対立、衝突のなかに根を下ろす際の、宗派ネットワーク上に増幅してトランスナショナルに伝播するメディアの役割に着目した。

さらには、宗派主義、宗派対立を巡り近年、数々の研究プロジェクトが海外で展開され、その結果や議論をまとめた学術書が公刊されていることを踏まえて、ここで交わされる諸議論を整理し、宗派主義とは何かという視座の問題から解きほぐした。上述した、本質主義的議論と

構築主義的議論の対立を超えて、また宗派主義という用語のもつ差別性、中傷性を克服していかに現実の宗派関係を分析するか、新たな視座を模索することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、基本的には政治学系の地域研究者を集めて、地域研究的手法を軸として行われた。研究分担者として、末近浩太（シリア・レバノン現代政治）、山尾大（イラク現代政治）、松永泰行（現代イラン政治）、松本弘（現代イエメン政治）、松尾昌樹（現代湾岸諸国政治）を参画せしめ、それぞれが担当する地域の現地資料を収集、現地でのフィールド調査を行うとともに、欧米先進国の当該分野での一線の研究者との意見交換を、世界中東学会（於スペイン、2018年）や国際政治学会（於オーストラリア、2018年）など国際学会や、欧米の諸研究機関が主催する各種国際ワークショップの場を利用して行った。特に山尾は、選挙分析、イラク国内での世論調査分析を用いて、イラクにおける宗派意識の変化を分析した。また千葉悠志（メディア研究）はインターネットや衛星放送といったメディアの発展を視野にいった宗派意識分析を行った。他方、保坂修司（湾岸地域研究）は、主として歴史研究の手法を用いて、サウディアラビア、クウェートにおけるシーア派社会の分析を試みた。

4. 研究成果

(1) 国際ワークショップ「中東における宗派主義 ～宗派がいかに政治・紛争に動員されるか?」"Sectarianism in the Middle East: how is it mobilized in politics and conflicts?"の開催（2017年9月21—22日）

研究期間において中間点となる2017年9月、いずれも宗派主義研究の第一線に立つ研究者（シリアの事例としてW.ハリス（オタゴ大）、クウェートの事例につきM.ウェルズ（米外務省）、イラクに関してF.ハッダード（シンガポール大）、湾岸地域に関してM.ジョーンズ（カタール・ハマド大）、国際政治に関してM.ヴァルピヨン（アース大））を海外から招聘し、国際ワークショップを開催した。これらの議論に対して、研究代表者、分担者からそれぞれの研究中間報告がなされ、相互の意見交換、討論を踏まえて、研究成果の精緻化を目指した。本報告のうち、ハッダード、ヴァルピヨン、ジョーンズの報告は、以下(3)で挙げる最終成果報告書の一部として公刊された。

(2) 代表者の酒井は、宗派対立、宗派対立を論じたこれまでの文献サーベイを行いつつ、宗派主義がもともと宗派軸ではなかった政治対立に動員されるという安全保障化のメカニズムを明らかにするイラクでの事例研究を、ラバト（モロッコ）で報告した（2017年9月）。また、オクスフォード（英）での宗派主義に関するワークショップ（2018年1月）では、酒井および松永がその研究成果を英語で報告し、宗派主義に関する国際的論争への一石を投じた。また2018年7月にスペインで開催された世界中東学会には、酒井、末近、山尾、松尾が参加し、それぞれの研究成果報告を行った。酒井は末近と共著でラウトリッジで編纂されている中東政治ハンドブックの「宗派問題」に関する項目の執筆を依頼され、現在出版の最終段階にある。

(3) 研究叢書「現代中東の宗派問題」（晃洋書房）の出版

本研究事業の成果として、前述の海外からの寄稿者を含めて全11章からなる研究書『現代中東の宗派問題』を出版した。日本で中東に関する宗派問題を扱った本格的な学術書は、本作が初めてである。同書は中東および欧米での「宗派」を巡る議論の展開を整理するとともに、宗派主義という用語の分析概念としての不十分さ、問題点を指摘し、さらにそうした「宗派主義的」用語がSNSなど新情報ツールに乗って拡散することで宗派間憎悪が蔓延していることを論じた。そしてそこでは「中東新冷戦」ともいわれる国際政治環境の影響を無視できないことが論じられた。以上の枠組み設定と概観を行った上で、シリア・レバノン、イラク、湾岸諸国、イエメン、イラン、トルコの事例分析を掲載した。本書は2019年3月に晃洋書房より公

刊された。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計37件)

千葉悠志 「「アラブ革命」の余燼——政治変動を前後とした中東メディアの変容」『マス・コミュニケーション研究』査読有, 日本マス・コミュニケーション学会, 94, 2019年, 151-168.

保坂修司 「ハーショグジー・ゲート」 『中東動向分析』 査読無, 2018年11月, 1-17.

末近浩太 「レバノン第19期国民議会選挙とヒズブラーの躍進」『中東研究』査読無, 第533号(10月), Vol. 2, 2018/19, 2018年, 68-84.

Yamao, Dai “From Regional Politics to Street Demonstrations: Changes in the Iraqi Communist Party’s Political Strategies in the Post-war Era”, *International Journal of Contemporary Iraqi Studies*, 査読有, 12 (2), 2018, 147-165.

Suechika, Kota. “Strategies, Dynamics and Outcomes of Hezbollah’s Military Intervention in the Syrian Conflict,” *Asian Journal of Middle Eastern and Islamic Studies*, 査読有, Vol. 12, No. 1 (March), 2018, 89-98.

酒井啓子 「イラクにおける1991年インティファダの記憶と祖国防衛」『千葉大学グローバル関係融合研究センターワーキングペーパー』査読有, No.2, 2018年, 1-28.

山尾大 「ISなきイラクをめぐる競合—選挙戦略とクルディスタン地域政府(KRG)の住民投票」『中東協力センターニュース』査読無, 1月号, 2018年, 8-28.

酒井啓子 「現代イラク政治における部族と政治権力の関係」『中東研究』査読無, (1), 2016年, 7-19.

保坂修司 「アルカイダからイスラーム国へ: ジハード主義の来し方行く末」『世界』査読無, 887, 2016年, 79-87.

松永泰行 「イランの核合意・制裁解除—その意義, 背景と余波」『歴史学研究』査読無, 948, 2016年, 17-21, 54.

松本弘 「イエメン内戦の背景と特質」『海外事情』査読無, 2016年, 18-29.

〔学会発表〕(計25件)

保坂修司 「ハーショグジー事件とその後——迷走するサウジアラビア」情勢分析報告会, 経団連会館, 2019年2月7日

Chiba, Yushi. "Reflection on Arab Media in the Post-Uprising Phase: The Whereabouts of Media Freedom," 2018 KAMES International Conference on The Middle East in an Era of Transition, Reorganization of the Regional Order and the Search for Partnership, at Hunkuk University for Foreign Studies (HUFS), Seoul, 13 October 2018.

末近浩太 「地域研究は教えられるのか: 各国政治・比較政治・国際政治との関係から」2018年度日本比較政治学会研究大会, 東北大学 2018年6月23日

山尾大 「地域研究と政治学を架橋する——イラクを事例に」『日本中東学会』上智大学, 2018年5月12日

Sakai, Keiko. “Competing for Victimhood and Nationhood: Sectarianism in post-war Iraq as a legitimization of the right to rebel”, Conference “Re-thinking Nationalism, Sectarianism, and Ethno-Religious Mobilisation in the Middle East”, Oxford University, 26-28 January 2018.

Matuo, Masaki. “Neo-Plural Society in the Arab Gulf States”, Migrants in Global

Cities (International Collaborative workshop, 30-31 October 2017, at National University of Singapore, Singapore).

Sakai, Keiko. “Obstacles to Democratisation in Post-War Iraq: securitizing sectarian diversity”, International Conference ‘From Democratic Transition to Democratic Learning’, Rabat, September 28, 2017.

〔図書〕(計17件)

Sakai, Keiko and Suechika Kota, “Sectarian fault lines in the Middle East: sources of conflicts or of communal bonds?”, 査読有, Larbi Sadiki ed., *Routledge Handbook on the Politics of the Middle East*, Routledge, forthcoming

酒井啓子編著、末近浩太、松永泰行、山尾大、松本弘、保坂修司、千葉悠志、幸加木文他著『中東の宗派問題—政治対立の「宗派化」と「新冷戦」—』査読無, 晃洋書房, 2019年, 273頁

山尾大「立ち上がったイスラーム主義——戦後イラクにみる多様な展開」、高岡豊・溝淵正季編著, 『「アラブの春」以後のイスラーム主義運動』査読無, ミネルヴァ書房, 2019年, 336頁

末近浩太『イスラーム主義：もう一つの近代を構想する』査読無, 岩波新書, 2018年, 256頁

松尾昌樹編著『オマーンを知るための55章』査読無, 明石書店, 2018年, 280頁

保坂修司『ジハード主義——アルカイダからイスラーム国へ』査読無, 岩波書店, 2017年, 234頁

Chiba, Yushi, “Location, Regulation, and Media Production in the Arab World: A Case Study of Media Cities”, Nele Lenze, Charlotte Schriwer, and Zubaidah Abdul Jalil (eds.), *Media in the Middle East: Activism, Politics, and Culture*. 71-88, Palgrave Macmillan, December 2017.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：松尾 昌樹

ローマ字氏名：Matsuo Masaki

所属研究機関名：宇都宮大学

部局名：国際学部

職名：准教授

研究者番号(8桁): 10396616

研究分担者氏名：松本 弘

ローマ字氏名：Matsumoto Hiroshi

所属研究機関名：大東文化大学

部局名：国際関係学部

職名：教授
研究者番号（8桁）：10407653

研究分担者氏名：松永 泰行
ローマ字氏名：Matsunaga Yasuyuki
所属研究機関名：東京外国語大学
部局名：大学院総合国際学研究院
職名：教授
研究者番号（8桁）：20328678

研究分担者氏名：末近 浩太
ローマ字氏名：Suechika Kota
所属研究機関名：立命館大学
部局名：国際関係学部
職名：教授
研究者番号（8桁）：70434701

研究分担者氏名：千葉 悠志
ローマ字氏名：Chiba Yushi
所属研究機関名：公立小松大学
部局名：国際文化交流学部
職名：准教授
研究者番号（8桁）：70748201

研究分担者氏名：保坂 修司
ローマ字氏名：Hosaka Shuji
所属研究機関名：早稲田大学
部局名：総合研究機構
職名：客員上級研究員（研究員客員教授）
研究者番号（8桁）：80421220

研究分担者氏名：山尾 大
ローマ字氏名：Yamao Dai
所属研究機関名：九州大学
部局名：比較社会文化研究院
職名：准教授
研究者番号（8桁）：80598706

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。